

BankART1929はどこに行く？

2009年発行『BankART Lifell』より転載

BankART1929は、横浜市が推進する歴史的建造物や倉庫等を文化芸術に活用し、都心部再生の起点にしていこうというクリエイティブシティ(創造都市)プロジェクトのひとつ。市はクリエイティブシティ実現に向けて4つのプロジェクト(ナショナルアートパーク構想・創造境界の形成・映像文化都市・横浜トリエンナーレ)を推進しているが、ふたつめの創造境界の形成が私達に与えられた最も大きなミッションだ。創造境界などというわかりにくいかもしれないが、別の言葉でいうと、都市における新しい町屋(コミュニティ)の創出といえるだろう。

旧第一銀行を改修・再現したBankART 1929 Yokohamaと日本郵船の倉庫を改修したBankART Studio NYKの二棟が横浜市から無償貸与されている。両館で約3,000平米。水光熱、保険、警備、設備、清掃等の維持費として約4,000万、2館の管理業務人件費として約2,000万、企画事業費として約2,000万が市から補助されている。これらとは別にBankARTの自己収益が約8,000万あり、その合算で運営されている。常勤スタッフが10人、アルバイトが同数程度。事務、企画系の区別はない。カフェ&バブ、スクール等のベース事業を重要視しつつ、主催及びコーディネート事業で年間約350本(＋スクール開催が300日)に及ぶ事業運営を行っている。行政視察は他都市でのレクチャーを含めると年間200を越え、海外からも増加している。2003年末に市が運営者を公募し、2004年3月にスタート、約2年の実験期間を経て、現在は本格的な事業へと移行し、2009年度末まで市と事業協定が結ばれている。移行にあたっては、推進委員会からの指針を受けて3年間の計画案を提出し、継続運営が承認された。骨子は次の3つ。①創造境界プロジェクトのバイオニア的存在としての自覚 ②他都市及び国際的なネットワークの構築 ③さらなる経済的な基盤の確立。

5年目に入った現在、この実験事業の特徴や社会に投げかけてきたこと、これから先のこと、そしてその先の未知なる10年のこと等を記していきたいと思う。

1 BankARTの特徴～キーワードから

はじめにBankARTの特徴を主なキーワードを中心に紹介してみよう。

名前の由来は、Bank+ART。元銀行だった建物を文化芸術活動にという造語。1929年は第一銀行、富士銀行がともに竣工された年であり、ニューヨーク近代美術館が設立された年でもある。また世界恐慌もこの年で、経済が厳しいときこそアートを!の願いを込めて名付けた。

公設であるため広く市民を受け入れることを積極的に行っている。一方、民営であることで先駆的な活動を強く推進することも可能。公設民営の新しいあり方を探ってきている。運営を円滑に進めるにあたって推進委員会の存在は大きい。有識者から構成される委員会(もともとは選考委員会)が3ヶ月に一度ペースで開催され、委員、横浜市、BankARTの三位の独立した立場での緊密な会議が継続されている。

芸術のための芸術ではなく、街づくりのためのツールであること。ある行政マンからこの言葉をはじめ聞いたときは「???!!」という感じだったが、ツールである限りよく切れるハサミでなければならない。横浜市はよく切れるハサミを提供してくれた。

それは自由度というツールだ。スクール、バブ等の収益事業、収益の再投下、24時間の建物使用、その他民間レベルの自由度が与えられている。

運営者決定から開館までが45日というのが主な理由だが、ハードもソフトも未完成のままスタートした。ほとんど準備なしにバブやスクールを開始したことで、様々な人々や専門家が関わることで成長していくシステムとなった。哺乳類の中で人間の赤ちゃんが最も未熟な状態で生まれるというのは周知の

こと。同様に私達も様々な知恵や力を授かることができたと考えている。

ピッチャー型ではなくキャッチャー型。自らの企画も力強く打ち出すのが、市民やアーティストなどのオファーを可能な限り受け入れ、コーディネートすることに最大の力点を置いている。アーティストックになりがちな企画案も委員会などでアドバイスをもらうことで懐をつくることができた。来るものは拒まず、可能な限り断らない、入口は低く、出口は少し厳しうが基本方針。

市民との協働。国際的なレベルでの芸術文化の発信と市民との協働プログラムの両立させるのは難しい面もあるが、これまで様々なプログラムを試みている。地域の人たちからホールで使う椅子(ソファ)300脚を集めた「椅子プロジェクト」。モダンガールモダンボーイの写真を集めることで高齢者や開港5都市(あるいはその姉妹都市)とのネットワークを築いていくプロジェクト「モボ・モガを探せ!プロジェクト」。ホールに入るためのスロープを障害者とともに手作りでおこなったプロジェクト「橋をかけろ!」等々。

時間と空間の使い方も工夫している。歴史的建造物であり、暫定使用かつ様々なジャンルに対応しているため、巨大な展示壁面や受付カウンター、照明、音響等、全て移動式を採用。基本的に年中無休でオールナイトのイベントにも対応。雑誌撮影等、表現を伴わない事業は開館時間前に終了させることで販路を開いてきた。コンビニがそうであるように都心部の土地の高い場所をタイムシェア・スペースシェアしながら高密度で活用することをごく自然に行なってきた。

2 BankARTの特徴～事業内容から

今度はBankARTの特徴を事業の構成面からみてみよう。ラジカルな運営方法をとっているようにいわれるが、よくみると基本的に既存の美術館や画廊、その他のプロジェクトとあまり変わりはない。受付があり、バブやカフェ、アーティストが活用するスタジオがあり、講座があり、企画展やコーディネート(レンタル)事業があり…。ではなぜBankARTが、他都市や海外からも注目を浴びようになってきたのか?

例えばフロント業務。イベントがなくても、建物や風景を見にくる人々に対して広く開き、リピーターを育てるシステムをつくってきている。会話を介して来館者の情報を丁寧に収集し、受付というよりも、もう一歩進んだリスポンスを行っている。それもあって3万5千件を越える住所録データベースと2万通のメール配信を実現している。

BankARTショップは芸術系のブックショップ。2万円/日の売上しかないので専門の担当者は設けることはしない。受付業務で細々といい本をという経営方針で継続している。

BankARTバブは毎日夜11時まで営業している。スタジオアーティストやスクールのアフタートークに、また一般の人たちの開口部として事業全体の交差点的な重要な役割を担っている。

BankARTスクールの特徴は、小さいけれど学校であるということ。2ヶ月で8コマ、20人の少人数制で月～土曜まで毎日開催している現代の寺子屋だ。これまでに150講座、450名の講師、2000名以上が受講している。学生同士、先生と学生との交流を大切にしており、最近は自主的な発表も増えてきた。例えば福住謙氏による美術批評のゼミではアフタースクールの有志で批評紙を創刊(現在3号)。飯沢耕太郎氏の写真ゼミではグループ展を、梅若猶彦氏の能楽ゼミでは有料公演で350名の動員を記録した。

アーティストインスタジオ。NYKには20～80平米のスタジオが9つあり、基本的に2ヶ月単位でアーティストに廉価で提供、オープンスタジオ等を行いながら活発に活動している。サテライトとして設けたBankART桜荘、

BankARTかもめ荘等のレジデンススペースと連携を図ることで、海外や他都市からの受け入れも可能になってきた。

コンテンツ事業。展覧会カタログはもとより、独立したかたちでのプロジェクトとして若いクリエイターの数多くの書籍・DVD等の出版を活発に行っている。

コーディネート事業はBankARTの最大の特徴。通常のレンタル事業に留まらず、1対1で対応し、プレス協力等、BankARTが関わることでイベントそのものが向上するように心がけている。内容が面白ければ企画協力、予算提供も惜しまない。年間オファーは約1,200本でそのうち1/3程度が実現している。

主催事業の基本的な考えは横浜の持っている財産をリレーし、よりコンテンツポラリーに展開すること。街、建物、食、写真、大野一雄他、これらの横浜のもつポテンシャルをどのように引き出すことができるかが、継続的なテーマ。「食と現代美術～横浜芸術のれん街」や、「Landmark Project」のように街とコラボレーションする企画や「地震EXPO」の防災とアートのように他分野との協働事業も数多く行っている。

3 BankARTの特徴～エピソードから

次はいくつかのエピソードを中心にBankARTの特徴を論じてみよう。

リレーする構造～レスポンス

運営開始からわずか4ヶ月、信じられない話がとびこんできた。東京芸大大学院の映像学科がくるのでBankART1929 馬車道（旧富士銀行）を明け渡してくれと。縦割り構造の弊害で庁内でも険悪なムードが漂っているし、運営している側としても簡単に首を縦にふれるような事柄でもない。とはいえ東京芸大がくることは横浜にとっては嬉しいことだし、私達の活動が誘致のきっかけの一部になったというのも聞いていたので、明け渡しそのものには反対する理由はなかった。そこでBankARTは3つの条件を市に提案した。①歩いていける場所 ②同等以上のスペース ③タイムラグなく移転できること。横浜市はこれらの高いハードルを全てクリアしてくれた。日本郵船への強い働きかけ、補正予算のスピーディな確保、移転先の建物の12月末までの改修工事。1月にはBankART Studio NYKのオープン。旧富士銀行大規模改修工事を経て4月に芸大オープン。これら一連の仕事を見事にやりぬいてくれた。

リレーする構造～連鎖反応

BankARTの活動がほぼ1年経過したころ、森ビルがBankARTの真向かいの北仲地区の帝蚕倉庫群を再開発することになった。着工までの約2年間、仮囲いで閉ざすよりも、道路に面した事務所棟等を活用して何かできないかという相談を受けた。固定資産税と軽微な管理費は捻出して欲しいという条件があったので定期借賃しかないと判断した。1Fが小部屋に分かれており、若いアーティストでも家賃を払える間取りだし、3Fと4Fは比較的大きな部屋割りなので力量のある建築家チームなどに向いているという勝算もあった。縁のあった約60チームに声をかけ、二度の下見会で約50チームの入居が決定。廉価な家賃設定と森ビルのスピーディな対応も相まって、3ヶ月足らずでオープンという奇跡がおこった。建築チームの「みかんぐみ」が早々に移転を決めてくれたことによる誘因力も大きかった。付け加えると、このプロジェクトはある行政マンの個人的な担保がなければ実現していない。役所の枠を越え、BankARTを信頼してくれ、森ビルという企業に私達をプッシュしてくれたのだ。

このプロジェクトについてふたつだけ言及すると、よいクリエイターが集まると自然発酵するという。北仲プロジェクトはもちろん所有・管理運営は森ビルだったが、入居者自身による意志とプロデュース力で街に開き、発信していくプロジェクトに成長していった。もうひとつは、こうしたアーティストの動きに反応して、市が北仲の暫定使用終了時期を見据えて「ZAIM」を準備・開設してくれたこと。一般公募だったが、北仲の入居者の約1/3が移り住んだ。またクリエイターの事務所開設の際の初期費用補助制度を新たに設けるなど、市はアーティスト誘致に関しても積極的な施策を打ち出しはじめた。連鎖反応が始まったのだ。

リレーする構造～都市の経験

これまであまりかかわりのなかった民間へのリレーもある。本町ビル45（シゴカイ）がそれだ。ZAIMの入居条件が少し不安定だったため、北仲の建築系のチームが移転をためらった。誘致した責任もあったので入居物件探しに奔走したが、なかなか見つからない。最後に出会ったのがBankARTの目の前の本町ビル。オーナーが私達の活動に理解を示してくれた。再開発計画のあるビルの4・5階を北仲と同条件で提供してくれたのだ。「おたくたちの活動はこの二年間みていましたから」といわれたときには嬉しさと同時に身の引き締まる思いだった。正に都市の経験という言葉があてはまる象徴的な出来事だった。このように、この間、横浜市、民間等、各々が反応しながら、街を少しずつ柔らかく形成してきたように思う。

この数年、横浜でおこってきたことを少し整理してみよう。

2004年	3月	BankART1929 スタート（旧第一銀行+旧富士銀行）
2005年	1月	BankART Studio NYK スタート（旧日本郵船倉庫）
	4月	東京芸大映像学科大学院スタート（旧富士銀行）
	6月	北仲 BRICK&WHITE スタート（旧帝蚕倉庫事務所棟）
	9-11月	横浜トリエンナーレ 2005 開催
2006年	3月	万国橋 SOKO スタート（バンタンキャリアスクール・山本理顕事務所他）
	4月	ZAIM オープン（旧関東財務局）
		東京芸大大学院映像スタジオオープン（新港ふ頭）
	6月	BankART 桜荘オープン（防犯とアート）
	10月	急な坂スタジオオープン（旧老松会館）
		北仲 BRICK&WHITE 終了
	11月	本町ビル45（シゴカイ）スタート
2007年	3月	横浜国大建築都市スクール“Y-GSA”スタート（馬車道）
	6月	Kogane-X Lab スタート（横浜市大十地域協議会）
	9月	創造空間 9001 スタート（旧東横線桜木町駅）
	10月	ザキ座スタート（伊勢佐木町3～7丁目の発信基地）
2008年	9月	日ノ出スタジオ・黄金スタジオオープン（京浜急行の高架下）
2009年	9-11月	横浜トリエンナーレ 2008 開催
		運動したかたちで BankART Lifell と黄金町バザール開催

4 徹底的に開くこと

キーワード・事業構成・エピソードをもとにBankARTの特徴を述べてきたが、これらを支える最も基本的な「開くこと＝シェアすること」については触れてみたいと思う。開館当初記した「駅と易」という文を引いてみよう。「BankART1929は駅でありたいと考えている。ヨーロッパの駅のように様々な人々が行きかい、コーヒーやビールを飲み、ベンチで眠っている人、たまにはケンカをする人、自由に音楽を奏でる人がある、そんな包容力のある心地よく過ごせる空間を目指していきたい。また横浜は貿易の街。人が集まり、アーティストが育ち、物が動き、情報が行きかい、経済が動く、交易の場所。何か表現する人もそれをサポートする人も、それで食べていけるような経済構造へと共に変換していきたい。BankARTはそのための実験の場所でありたいと考えている。」

私たちは徹底的に開くことを試みてきたと思う。どうしたらこの施設が親しま

れ、街で機能し、この仕事で生計をたてていけるのかを、既存の美術館等のもつシステムを展開する中から見いだしてきたつもりだ。「横浜トリエンナーレ2005」と連動し、BankART全館を50日間、24時間開放することを行った「BankART Life~24時間のホスピタリティー」の展評で南雄介氏（国立新美術館学芸員）が次のようなメッセージを送ってくれた。（抜粋引用）

「『展覧会場で泊まれるか?』というキャッチコピーが掲げられているが、夜間はトリエンナーレ公認ボランティア・作家アシスタントが利用でき、実際に宿泊できるのだという。くつろぎの空間づくりは、トリエンナーレの第二会場といった印象も呈していて、そしてよりいっそうリラックスした（「ゆるい」、というべきか）ものになっていた。それは、展覧会としてのテーマに起因する部分ももちろんあるのだが、それとともにNPOの運営によるオルタナティブ・スペースというこの会場の特性にも由来するものなのではないか。憩いの空間という主題への取り組みは、作者が建築家なのかデザイナーなのかアーティストなのかによって、当然のことながら位相の違いがあるのだが、そういう異なった要素が混在しているために全体の構成がほどよくくれているような印象を受けた。要するに、さまざまな要素が相まって、リラクゼーションの実現に貢献していたのだと思う。

一方で、「展覧会場で泊まれるか?」という問いかけは、トリエンナーレが掲げたアートや展覧会の枠組みの問い直しとも重なる主題であろう。ここに見られるラディカリズムは、またBankARTが活動を開始したときから目指されてきた種類のものでのこの組織の硬派な側面や理論的な可能性を代表しているのではないと思う。「BankART的生活/BankARTでの生活」というもう一つのキャッチコピーに、それはよく現われている。このスペースの活動の集大成的な表現ともなっているように、私には思われた。（中略）トリエンナーレのような巨大イベントと連動し、それをBankART自体のテーマに即して読み替えることで、BankARTの活動そのものが持っている重要性や国際性が、大きな意味を持って浮上しているのではないだろうか。」

ラディカリズムという言葉がふざわしいかどうかは別にしてBankARTは公設で行なえる限界まで、徹底的に開くことを行ってきたことは確かだ。

5 BankART Lifell へ（都市に棲む）

こうしたコンセプトをさらに展開して、2008年秋、横浜トリエンナーレと連動し、これまで行ってきた主催事業（食と現代美術・Landmark Project・大野一雄フェスティバル他）を総合的に駆使し、公的建物（市庁舎・駅等）、歴史的建造物、産業遺構、飲食店や商店、空き地、空店舗等と協働し、街に全面的に展開していくプログラムを推進した。開催エリアは、横トリ開催地区と黄金町バザール開催地区をつなぐ地域、すなわち新港・馬車道~伊勢佐木町1~7丁目ラインと大岡川沿いの桜木町・野毛地区・日ノ出町・黄金町ラインには含まれる全域。

BankART 1929 Yokohama本体での「心ある機械たち」展、横浜市庁舎ホールを使っの3作家のコラボレーションによる大きなインスタレーション、馬車道駅構内の「開港5都市モボ・モガを探せ!」、未知なる空間を切り開いていくLandmark ProjectのNYKの屋上における大規模な「ルーフトップパラダイス」。馬車道、野毛地区等、22施設、飲食店約300店舗等と連動する「Noren flagartプロジェクト」では、「横浜トリエンナーレにいこう!・BankART Life・黄金町バザール」とロゴが入った、横トリ応援フラッグを街中に挿入した。大野フェスティバルでは産業遺構である台船を活用した舞台を川に設け、アグレッシブな連続公演を行った。またBankARTスクールもこの時期は「出張BankARTスクール」と称し、市郊外部18区に積極的に入り込んでいき、行政や地域のNPO等と協働しながら、普段一般公開されて

いない場所等で地域のキーマンをゲストに迎え、開催した。運営スタート時から問われ続けている最も定義しがたい「横浜市民」とどのような関係を切り結ぶことができるかの最初の試みだった。

このように、最初に記したみつのミッションのひとつ「創造界隈プロジェクトのバイオニクス的存在としての自覚」を明確に意識しながら歩んできた。

6 終わりに ~トップダウンからボトムアップへ

冒頭に触れたように、本来なら『その先の未知なる10年』についても言及しなければいけないのだろうが、ここでは現在感じている、あるいは着手しはじめていることを素直に表現して、締めくくりたいと思う。

いつもBankARTは恵まれているなど思う。予算や施設面、給与などは決して他の公設の施設に比して好条件とはいえないが、何よりも常に行政の人々が一生懸命だし、実験事業であることの自由度がありスリリングで本当に楽しい。でもこれからはどうなのか？ はたしてこのままトップダウンの用意された作文の上にあぐらをかいていてよいのか？

ニューヨークでもベルリンでもアートがイニシアティブをとって街を形成してきた。不合法に略奪した場所でも、民間、行政、国がリレーし、その文化度を上げることで街を展開してきた。でもこの方法は現在の日本にはあてはまらない。横浜市がおこなっているように行政からスタートし、民間と組んで、民間に移管し…という方法をとらざるをえない。問題はここから先だ。

誤解を恐れずにいうと、BankARTはだからこそ、今の段階で野に下ることが重要だと考えている。今後も行政との協働作業は続け、大きな支援を受けて運営されていくことは確かだが、だからこそBankARTは自ら関わりたい場所を見つけ、耕し、経済的に自立していくことが大切なのだ。ある指定管理者制度に関連するシンポジウムの席で「モチベーションもなくできた美術館は、モチベーションもなく消えていく」と発言した。この言葉はむしろBankARTそのものに突きつけられている言葉だ。

BankART1929は第二段階に入ったと思う。自身がより深く都市に入り込み、思考し、自分の体を少しばかり変形し、敵意を歓待に変え、都市の経験を蓄積し、そして徹底的に開いていくこと。こうした作業を淡々と続けていきたいと考えている。